審査員特別賞

「　恩送り　」

経営学科　２年　阿部萌霞

私には、どうしてもお礼を言いたい人がいる。これだけＳＮＳが普及している時代だから、もしかしたら伝手を使えば連絡がつくかもしれない。だけど、そういう事ではないのだ。

それは２年前のとても暑いオープンキャンパスの時、自分の名前、しかも下の名前を呼ばれて驚いたのは、後にも先にもあの時が一番だったと言い切れる。名前を呼んだ後、ぱっと笑顔で駆け寄ってきてくれて、まるで高校の先輩だったかのように話しかけてくれて、緊張が一瞬で和らいだのを昨日のように覚えている。なんと！前回のオープンキャンパスで話した先輩で、コロナ禍でマスク必須だったのにも関わらず、私のことを覚えていてくれたのだった。声をかけてもらえたので、色々聞きたいことや不安なことなどを質問できた。自分の専門外のことは応えられる別のスタッフを探してきてくれて、嫌な顔どころか、「萌霞ちゃんなら大丈夫！絶対！大丈夫だからぁ！」と何度となく言って励ましてくれて、大きな力になったと同時に、とても嬉しい思いと感謝の気持ちでいっぱいだった。その時に、どうしても学生スタッフがしたいと思った。その先輩は、私とは入れ違いに卒業してしまった。先輩から受けた大丈夫の魔法のおかげで、無事に入学出来、学生スタッフにもなれた。でも、報告もお礼も言えていない、恩返しもできていない。今になって思うが、学生スタッフはコミュ力モンスターの集まりで、当時の私は人見知りで、コミュニケーション能力も低かったので、思い切った挑戦でよく受かったなと今でも思う。

日本には美しい言葉がある。「恩送り」先輩に受けた恩を、学生スタッフとしてだけではなく、生活全般の中で活かして、笑顔を忘れず楽しく過ごしていきたいと思う。なぜなら、恩送りは無限大だから・・・。